

各教育活動の時期、内容と 資質・能力のつながりを明示

現場の声を基に作成した 教育活動の実施計画モデル

これからの学校教育においては、教育課程として明確化する教科を中心とした教育計画だけでなく、学校行事や部活動等の教科外の活動についての教育計画のあり方を考えることも求められる。教育課程同様、教科外の活動における教育計画も、各教育活動を通じて生徒にどのような資質・能力を育むのか、すなわち、各教育活動の内容と育成を目指す資質・能力との関係を明確化することが重要であろう。そして、学校行事や部活動等の各教育活動を3年間でどう展開していくのか、教育活動全体の実施計画を作成することが、各教育活動の着実な実践と、学校教育目標の実現のためにも求められる。

これまで、学校行事や部活動等の教科外活動について、自校の生徒に

育みたい資質・能力と関連づけて活動内容を吟味する学校は決して多くはなかったのではないだろうか。事実、VIEW21編集部が現場にヒアリングしたところ、「学校行事は前年・前任者踏襲になりがち」「生徒にとつて息抜きになればよいと、教育活動ではなく、単なるイベントとして捉える傾向にある」といった声もあった。

だが、今後求められるカリキュラム・マネジメントの視点で考えると、学級・学年活動、文化祭や体育祭、進路講演会といった学校全体の行事、部活動なども資質・能力育成のための教育活動として、授業などの教科活動と有機的に関連づけていくことが求められる。

そこで、VIEW21編集部では、教育課程表と同様に、現場の教師から様々な意見・アイデアをいただき、教科外活動も含めた各教育活動の内

容と、そこで育成を目指す資質・能力を明確化し、各活動を3年間でどのように展開していくのかが見渡せる教育活動計画のモデル(図1)を作成した。

各教育活動でどのような 資質・能力を育むのかを明確化

教育活動計画のモデルの構成を具体的にみていく。同モデルの左側は、各教育活動を通じて生徒にどのような資質・能力を育むのか、すなわち、各教育活動の内容と育成を目指す資質・能力との関係を明確化する部分である。教育課程表のモデル同様、それぞれの教育活動で特に生徒に伸ばしてほしい資質・能力に「○」や「□」などで印をつけ、各教育活動と育成を目指す資質・能力の関係を明確化する。

同モデルの右側は、各教育活動を

いつ、どのようなことに重点を置きながら、どのような方法・手段を使って指導していくのかを示す、教育活動の実施計画部分となる。ここでは、各教育活動の個別の内容まで落とし込むことになる。

このような実施計画を作成することで、各教育活動を担当する教師は、指導のポイントを視覚的に確認できる。その結果、教育活動のねらいが、学校教育目標から無自覚にぶれてしまふのを防ぐことができ、また、各教育活動を有機的に結びつけて指導することが可能になる。

実施計画のよりどころとして の年間指導ストーリー

この実施計画の最も重要な要素の1つが、年間の指導ストーリー部分である。ここは、月、学期など、ある程度の期間のまとまりの中で、目指す資質・能力をどのような視点で指導していくのか、年間の指導の大きな方向性を示す部分である。この大きな指導のストーリーがあって初めて、各教育活動の個別の実施計画に落とし込むことができる。

では、3年間の指導ストーリーは、



図1 教育活動計画のモデル

() 高等学校 () 年度入学生 第 () 学年 教育活動計画

教育活動		育成を目指す資質・能力	指導計画	
活動種類	活動名		指導ストーリー	
			4月	5月
			活動名	
			指導テーマ	
			指導ツール	
			活動名	
			指導テーマ	
			指導ツール	
			活動名	
			指導テーマ	
			指導ツール	
			活動名	
			指導テーマ	
			指導ツール	
			活動名	
			指導テーマ	
			指導ツール	
			活動名	
			指導テーマ	
			指導ツール	

自校で育成を目指す資質・能力の数に合わせて、この欄を縦に分割し、左に挙げた教育活動それぞれについて、特に生徒に伸ばしてほしい資質・能力に「◎」や「○」などの印を記入する(P.13 図2の山梨県立吉田高校の教育活動計画を記入例として参照)。

月、学期など、ある程度の期間のまとまりの中で、目指す資質・能力をどのような視点で指導していくのか、年間の指導の大きな方向性(=3年間の指導ストーリー)を記入する。

各教育活動について、どのようなことに重点を置いて指導するのかを「指導テーマ」の欄に、指導にあたってどのような方法・手段を使うのかを「指導ツール」の欄に記入する。

図2 3年間の指導ストーリー作成

先生方から伺った検討ポイント

今のストーリーを生かす

現在学校にある指導ストーリーを基にしなが、変化への対応を盛り込む

3年生からの逆算で考える

推薦・AO入試拡大に伴って入試対応スケジュールが変わる3年生からの逆算でストーリーを考える

中高接続期⇔受験生切り替え期

中高接続期指導で何を意識づけし、定着させるか、入試に向けて、何を切り替えていくかを考える

生徒・保護者に示せるもの

次年度に1年生となる生徒・保護者に、自校の指導に安心感を持ってもらえるものにする

具体的などのように検討すればよいのか。その検討ポイントを現場の教師にヒアリングしたところ、図2で示す4点にまとめられた。また、3年間の指導ストーリーの具体例を、生徒が主に4年制大学に進学する学校の場合と、大学進学だけではなく就職などもする、生徒の進路が多様である学校の場合の2パターンで、現場の教師の声を基に作成した(P.12 図3)。自校の3年間の指導ストーリー作成の参考にされたい。

この3年間の指導ストーリーを含む教育活動全体の実施計画は、具体的にはどのようなステップで、どのような点に留意しながら作成すればよいのか。そして、その作成を通じて教師には何が見えてくるのだろうか。P.13より、自校で育成を目指す資質・能力を学校教育目標において明確化した山梨県立吉田高校(本誌6月号特集P.10〜13で紹介)による、教育活動計画の検討と作成の、その実践から考えていく。



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<http://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME → 教育情報 → 高校向け → バックナンバー → 2017年度8月号」をご覧ください。

生徒が主に4年制大学に進学する学校の場合

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年生	【適応】3年間の展望(自校で3年後にどうなっていきたいか、身につけるべき力)の提示			【自己理解】自分の現状の力(学力・学び方・総合的な力)を知る、自分の興味・関心を知る、他者からのアドバイスの機会を設ける(自分を客観的に見つめる、考える機会)			【社会理解】職業研究から、社会全体への課題を考える			【課題と向き合う】自らのキャリア希望に向けた課題の克服、苦手と向き合う(苦手教科、思考・判断・表現力、課題研究まとめ)		
	【把握】入学生の特性を把握し、指導に生かす			【学習習慣確立】入学時からの学習習慣(予習・授業・復習)が2学期でも続けられている			【量から質への転換】学習の入学時からの学習習慣(予習・授業・復習)が2学期でも続けられている					
2年生	【再出発】高1の体験を踏まえた積み残しの確認(自分で語る)			【経験・視野の幅を広げ、学びを深める】課外活動、知識・技能の定着を深める			【高校の学び中間総括】何ができるようになったかの自覚と自信、希望進路につなげる			【目標への基礎完成度を確認】入試・卒業までに身につけたいレベルとのギャップ(資質・能力)を確認する		
				【生徒個々に応じた力の引き上げ】生徒の希望進路や学習習慣や学習方法に差がつく時期に、個別での進路相談(迷わせ、揺さぶり、プラスの声かけで導く)、学習支援			【希望進路の揺さぶりと明確化】志望校検討、併せて志望校群入試に向けての戦略を立てる			【AO・推薦生徒の引き上げ】学びの総括からチャレンジの可能性のある生徒を引き上げる		
3年生	【キャリアプランの振り返り・再構築】出願戦略を立てる			【資質・能力 集大成発揮】これまで学んだことの集大成を発揮、思考力の自己表現						【進路実現】進路実現に向けた個別対応		
	【生徒個々に応じた目標設定】目標に応じたアドバイス			2年間の経験値を確かめて、そこからスタートさせる						進学先決定後のレディネスのアドバイス		

生徒の進路が多様である学校の場合

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年生	【適応】通学・学習の意義認知 生活習慣や礼儀の確認 学校帰属意識を高める 自分への興味を持つ			【自己理解】高校生としてのリスタート。科目選択に向けた自己理解			【社会理解】生き方を考える/自分を見つめ直す			【社会と向き合う】10年後の自分を見つめてみる(社会に出た時の自分をイメージする)		
	【自信】学力以外の物差しで生徒を見る。負のレッテルはがし。やったらできたの繰り返し			【学習姿勢】学習姿勢づくり 2回目の初期指導			【学習成果の山場】学びの基礎診断から逆算し、到達目標と現状の差を確認する			【学習への自信】1年間のまとめ、振り返りから成長を感じ自信を持つ		
2年生	【中間到達】1年次の学習の補完			【経験・視野の幅を広げ、学びを深める】学校の外での活動、中だるみの気持ちを引き締める。経験を広げ、思考を深める			【進路選択の揺さぶりからマインドセット】2学期を通じて本人が考えた進路選択になっているかを、揺さぶりをかけ2学期中に意志を固める			【就職・進学・AO・推薦の見極め】生徒の進路選択のいったんの腹決め		
				【学びを深める】強みを伸ばす指導 先輩の様子を見せて、1年後からの逆算で学習や進路選択への意欲を喚起			【中間ゴールと学びの総括】「進路決定への通過点」としての学びの基礎診断。求められる到達目標のクリア。身につけてきたことの総括			【フォローアップ】進路目標に応じた、到達目標とギャップのある生徒への対応		
3年生	【キャリアプランの振り返り・再構築】これまでの高校生活で身につけたことを再整理し、進路目標に応じて必要になる力を確認する			【資質・能力 集大成発揮】これまで学んだことの集大成を発揮、思考力の自己表現						【ギャップターム】次の進路までの準備。ブリッジ指導 内定後指導。社会体験(運転免許)を通じて、初めての社会の厳しいルールを体験させる		

生徒同士の対話を通して「吉高GP」の理解を深め、各教育活動の意味を明確化

山梨県立吉田高校

教育活動計画の検討に生徒が参加

育成を目指す資質・能力を学校教育目標「吉田高校グラデュエーション・ポリシー（以下、吉高GP）」と定義した山梨県立吉田高校では、あ

図1 「吉田高校グラデュエーション・ポリシー」(吉高GP)

- ① 自己肯定力 達成感を積み重ねることで、自信をつけます
- ② 傾聴力 他者の意見を謙虚に聴く習慣を身につけます
- ③ 分析力 事実を客観的に分析する習慣を身につけます
- ④ 思考力 物事を鵜呑みにせず、「何故か」を考える習慣を身につけます
- ⑤ 発信力 自分の考えを、わかりやすく他者に伝える方法を身につけます
- ⑥ 想像力 未来（結果）を考え、想像する力を身につけます
- ⑦ 創造力 課題を解決する方法を創造する力を身につけます
- ⑧ 行動力 自身の考えに基づき、行動する力を身につけます

*学校資料を基に編集部で作成

らゆる教育活動において、生徒、教師が各活動と吉高GPとのつながりを意識しながら取り組んでいる（本誌6月号・特集P.10〜13で紹介）。

今回、同校はVIEW21編集部が作成した教育活動計画のモデルを使って、1年次に年間を通して生徒にどのような力を育むのか、それぞれの時期にどのような教育活動をどのようなねらいの下に実施するのか、そして、各活動において吉高GPで定められた8つの力（図1）のうち、特にどの力を育成するのかを検討した。

その検討は、吉高GPの8つの力が日々の学校生活の中で養うものであることを、生徒と教師がこれまで以上に意識する機会となった。さらには、今後、同校において、学年や教科、クラスで個々の教育活動の詳細な指導計画を作成する際、各活

図2 教師が作成した吉田高校の教育活動計画 (抜粋)

教育活動		育成を目指す資質・能力								指導計画	
活動種類	活動名	自己肯定力	傾聴力	分析力	思考力	発信力	想像力	創造力	行動力	指導ストーリー：意識させる・浸透させる（学力観・学習習慣・生活習慣・8つの力）	
										4月	5月
学校行事	式典・全校集会		○				○			入学式・全校集会 話を聞く態度を育成する	
学習	学習指導			○					○	学習指導・ガイダンス 授業への取り組み方を身につけさせる 学習時間記録表・Yoshida Career Guide	学習指導 授業への取り組み方を身につけさせる 学習時間記録表・Yoshida Career Guide
学校行事	校歌・応援歌練習	○					○			校歌・応援歌指導 達成感を味わわせる	
学習	実力テスト・定期考査			○	○					実力テスト 知識の定着度を測る 自校作成テスト	第1回・定期考査 知識の定着度を測る 自校作成テスト
学習	模擬試験			○				○			模試 結果を分析する
学校行事	蒼風祭 体育祭 球技大会	○						○			
学校行事	富士登山 強歩大会	○					○				
学校行事	生徒指導に関する講演会・集会・活動		○				○			交通安全教室 想像力を鍛え事故を防止する	防災避難訓練 想像力と行動力を養う
学校行事	進路に関する講演会・集会・活動			○				○		進路調査・意識調査 自分を分析し将来につなげる 自校作成アンケート	
学校行事	環境に関する活動・大掃除・校外清掃活動			○					○		

*学校が作成した教育活動計画を基に編集部で作成

動と育成を目指す資質・能力とのつながりが常に明確になり、指導のぶれを防げるといった効果が期待された。

しかし、教育活動計画の作成には懸念もあった。それは、各活動で養う力を決めてしまうことで、学年やクラスの特徴に応じた柔軟な指導を阻害し、取り組みの形骸化につながるのではないかと懸念された。

そこで同校では、管理職など一部の教師が作成した教育活動計画をトップダウン的に全校に周知するのではなく、管理職と各分掌主任、そして、各学年主任による教育活動計画の作成（P.13 図2）と並行して、教育活動の当事者である生徒も教育活動計画の作成にかかわり、その意義を話し合った。教師は自分たちと生徒、異なる視点での教育活動計画の作成を踏まえて、よりよい教育活動計画のあり方を検討した。

ここからは、学校教育目標である吉高GPの実現のための教育活動計画を、どのように作成・運用すべきかを吉田高校の生徒が語り合った様子と、生徒の対話を観察する中で同校の教師が得た、教育活動計画作成のポイントについて報告する。

生徒による、教育活動計画検討会

学校の教育目標を、私たちはどのように理解しているか

1～3年生が学校行事で身につく力を検討

生徒による教育活動計画の検討は、次のような形で行われた。

まず、第1フェーズとして、1・2年生の各クラス代表11人が、1年次の授業から文化祭、校歌・応援歌練習、課外学習、朝読書に至るまでの様々な教育活動について、それぞれ吉高GPの8つの力のうち、特に身につくと考えられる2つの力を

学校生活での経験やそこの気づきを語り合いながら、教育活動計画の検討に臨む生徒たちと、その議論の様子を見守る教師たち。

2時間にわたって検討した（図3）。話し合いに際しては、同校の高保裕樹校長が作成したルーブリック（図4）が、8つの力の意味をよりリアルに理解するための参考資料として活用された。それと並行して、3年生のクラス代表7人が、これまでの高校生活を振り返りながら、生徒目線で8つの力の意味を約1時間話し合った。なお、クラス代表を含む全校生徒は、7月に行われた文化祭「蒼風祭」で、自分は8つの力のうちの

図3 生徒が考えた各教育活動で身につく資質・能力（抜粋）

教育活動		育成を目指す資質・能力							
活動種類	活動名	自己肯定力	傾聴力	分析力	思考力	発信力	想像力	創造力	行動力
学校行事	式典・全校集会		○						○
学習	学習指導			○			○		
学校行事	校歌・応援歌練習	○			○				
学習	実力テスト・定期考査			○	○				
学習	模擬試験			○			○		
学校行事	蒼風祭、体育祭、球技大会	○				○			
学校行事	富士登山強歩大会	○							○

*生徒が作成した教育活動計画を基に編集部で作成

どの力を身につけたいかを事前に考え、文化祭の後に自己評価を行った。その上で、第2フェーズでは、第1フェーズの話し合いに参加した生徒のうち各学年2人、計6人が教育活動計画の検討に参加し、8つの力の関係性や、各活動で8つの力のうちどの力が身につくかを話し合った。8つの力について仲間と話し合い、さらに、文化祭という教育活動で自分が身につけたい力を考えた上でその活動に臨んだ経験を持ち寄つ

「学校教育デザイン」を描く②

これからの教育課程・教育活動計画のあり方

た生徒たちによる、第2フェーズにおける話し合いの様子をダイジェストで紹介する。

学校行事で身につく力は極めて多彩

後藤 教育活動計画を最初に見た時に、どのような感想を持ちましたか。
佐藤 「この行事では、8つの力のうちのこの力を伸ばすんだ」というように、目的意識を持って行事に臨めるのではないかと思います。

図4 8つの力のルーブリック

力	説明	中学	高校	大学	目標
自己決定力	小さなことにも責任感・達成感を覚えることができる	自分の力や実力を認めることができる	自分の志願を達成し、積極的に挑戦に取り組むことができる	他人の長所と自分の長所を認め、自分の役割に責任が持てる	
傾聴力	相手の話を静かに聴くことができる	相手の話を聞きながら、要点を整理することができる	相手の話から、自分の考えとの共通点・相違点を整理し、自分の考えを伝えることができる	相手の話から自分の考えを整理し、相手の意見に賛同しながら相手の立場に立つことができる	
判断力	状況を客観的に観察することができる	整理した状況から問題点や課題を抽出することができる	状況を整理し、問題点や課題を抽出し、優先順位をつけることができる	整理した状況から、次のステップで取る手段を提案することができる	
思考力	日常生活で「何故？」を問うことができる	感じた疑問に対して解決する方法を考案することができる	感じた疑問を方法に則って、論理的に考えることができる	自分自身の考えを、他人に説明することができる	
実行力	相手に伝えたいことがあると思える	伝えたいことを、自分の手で発信することができる	伝えたいことを、相手に伝えることができる	伝えたいことが相手に伝わり、行動を起こすことができる	
理解力	物事や行動の背景を、表面的現象から理解することができる	物事や行動の背景を、表面的現象から理解することができる	これからのことを、現在の状況から考えることができる	未知の状況を、現在と比べて考えることができる	
計画力	進捗の手段を定めて、実行を監視することができる	進捗の手段を定めて、実行を監視することができる	進捗の手段を定めて、実行を監視することができる	未知の状況でも目的を達成するための手段を提案することができる	
行動力	実行したいことは実際に実行することができる	実行したいことを、その進捗はどうか、自分自身の進捗を把握して実行することができる	自分がとるべき行動を定めて、実行することができる	とるべき行動を継続し、周囲を巻き込んで実行することができる	

*学校資料をそのまま掲載

後藤 教育活動計画では、活動内容が異なる文化祭・体育祭・球技大会はひとつくりになっていますが、3つの行事に共通点はありますか。
鴻巣 3つともクラス単位で動く場面があるから、団結力を求められることが多い点共通しています。
鶴崎 団結力は吉高GPにはないのですね、団結するためには8つの力の中でどの力が必要なのかを考えてみませんか。例えば、意見の対立を乗り越えるには、傾聴力が必要ですよ。
鴻巣 団結するためには、目標が必要で、さらに目標を強く打ち出す発信力も求められると思います。
滝口 リーダーは、傾聴力を持って周りの人の思いに耳を傾け、心の中を想像した上で発信しないと、周りがついてこないですよ。
佐藤 発信力と傾聴力は一体になって初めて、その力が発揮されるもののような気がしてきました。
小侯 球技大会を振り返ると、勝ちたい気持ちが強くなりすぎて、スポーツが苦手な人が置き去りにされていた気がします。得意な人が苦手な人を支える関係があつてこそこの行事を通して、自己肯定力がむしろ損

なわれてしまうと思います。
鴻巣 話を聞くうちに、発信力よりも傾聴力なのではないかと思うようになりました。全員が楽しめるものにするには、いろいろな人がいることを理解して、それぞれの言葉に耳を傾けることが必要な気がします。
小侯 同じ行事でも人によって重視する力が違いますよね。役割のある人とならない人では、どの力を身につけることになるのか、さらに変わってくると思います。そもそも僕らは、3年間を通して8つの力をバランスよく身につけるべきなのか、それとも凸凹があつてよいのか……。
滝口 8つの力はこれからの社会で必要なものだから、バランスよく身につけた方がよいと思います。
鶴崎 でも、人によって力を入れること、目指すものは違いますよね。得意な人、苦手な人、楽しみたい人、結果を出したい人……それぞれの違いも尊重し合いたいです。
後藤 各教育活動で身につく力は、無理に2つに絞らないで、どの力をいくつ選ぶかは、個人に選択の余地を残してもよいのかもしれないですね。どの力を選んだかよりも、考えること自体が大切な気がします。

学校行事で身につけた力を日常生活で発揮する

滝口 文化祭や体育祭などの行事の多くは、限られた期間のイベントです。だからこそ、そこで学んだことや身につけた力を日常生活で

- 山梨県立吉田高校3年 小侯祥吾 (おまた・しょうご)
- 山梨県立吉田高校3年 鶴崎新治 (つたさき・しんじ)
- 山梨県立吉田高校2年 鴻巣有輝 (こうすけ・ゆうき)
- 山梨県立吉田高校2年 後藤大地 (ごとう・だいち)
- 山梨県立吉田高校1年 佐藤聡太 (さとう・そうた)
- 山梨県立吉田高校1年 滝口理奈 (たきぐち・りな)



生徒の話し合いを見守る教師たち。「吉高GPの8つの力を、生徒が対話を通して深く考えていたことに驚いた」(高保校長。右)

経験していない学校行事も多い1年生に、2・3年生が各行事の概要を説明しながら話し合いは進んだ。

らに深められるかどうか重要だと思いました。私は今回、応援歌練習を初めて体験しましたが、あの1週間の練習は確かにみんな本気だったけれど、その後の高校総体の壮行会

では声が出ていない人もいました。日常生活で生かされて初めて力が身についたと言えると思うのです。

佐藤 授業や部活動など、毎日あたり前にある活動の中で、行事などで身につけた力をどれだけ意識できるかはすごく大切なことですよ。

鶴崎 行事を単なるイベントに終わらせないために、行事ではあえて自分の弱点である力を意識して伸ばすようにすれば、行事での学びとその後日常生活との結びつきが強くなるような気がします。そして、行事の時は互いに苦手なことにチャレンジしているのだと共通認識を持てれば、みんなで支え合う関係づくりにもつながると思います。

小俣 そのためには、互いの得意や苦手に気づき、それらについて率直に語り合える雰囲気为学校に必要だと思います。自分が気づいていない長所を人に言ってもらえれば、今自分ができるでないことにも自信を持って向き合えるようになるはずですよ。

滝口 8つの力は、目標として掲げるだけでなく、その意味について常に話し合うことが大切なのだと分かりました。

生徒の対話から教師が学ぶ

学校教育目標を理解する生徒の姿に 新たな指導の可能性を展望する



学校教育目標である吉高GPと授業や学校行事などの教育活動との関連についての生徒たちの議論は、高保校長を含め8人の教師が見守った。およそ1時間の生徒の議論の後、教師たちは教育活動計画の運用について話し合った。

生徒が主体となって 教育活動の意味を考える

高保校長が問題提起したのは、教師が作成した教育活動計画を生徒に提供するかどうかだ。「生徒と教師とでは各活動でどの力が身につくのか、解釈が異なるところもあったが、それは問題ではない。重要なのは、先ほどの生徒たちのように話し合い、自分で考えることだ」と、高保校長は感想を語った上で、「教師

が作成した教育活動計画を生徒に提示することで、生徒から考える機会を奪うのではないかと問いかけた。

それを受けて教師からは、「2年次になると、学校行事などの内容もよく分かるようになるので、各活動でどの力を身につけるのか、生徒に自分で考えさせてはどうか」という案が提示された。一方で、「教師と生徒の考えが必ずしも一致していないからこそ、教師の思いを伝え、異なる価値観との出会いをつくってあ

吉田高校の教育活動計画の運用方針

図5

1 1年次までは、教育活動ごとに身につけてほしい力を教師が例示したものを渡し、2年次以降は生徒に考えさせるようにする。

2 クラス代表の生徒が学校教育目標について語り合う場を提供した上で、学年縦断のグループで話し合う。

3 話し合いの内容を踏まえて、生徒一人ひとりが、各教育活動で身につけてほしい力について改めて考え、各自の教育活動計画に反映させる。

*取材を基に編集部で作成



後列左から、舟久保豊先生(1学年主任)、飯室毅先生(進路指導主事)、高保裕樹校長、古屋勇人教頭、小俣義一教頭。
前列左から、東一孝先生(教務主任)、上村泰子先生(2学年主任)、仲條博紀先生(3学年主任)。

「したい」という声も上がった。検討の結果、1年次までは、教師が全項目記入・作成した教育活動計画を生徒に配布するが、その後は、各教育活動で身につける力については、生徒自身に考えさせ、その数も、1つの活動につき原則2つとしながら、最終的には生徒の判断に任せることとした。教師にとって教育活動計画は、学校教育目標と各教育活動の目的を結びつけ、各活動を具体化するために必要だが、同校では教師の考えを基に生徒自身にも考える機会を与えるという方針になったのだ。

生徒たちの議論で教師に特に印

象を残したのが、「学校行事などで身につけた力は、日常生活に生かされなければ意味がない」という言葉だ。それは、高校での学びは社会でも生きるものであることを、生徒が理解していることを証明する言葉だった。そこで、高保校長は「生徒は日常の大切さを強調していた。それならば、私たちは日常の根幹、つまり授業において、8つの力の育成をもっと意識すべきではないか」と、教師たちに問いかけた。それに対して、「文化祭での生徒の設定目標や自己評価を見て、発信力の自己評価が低い生徒が多かったので、自分の授業では発信力を強化できるようにな

仕かけを意図的に取り入れている」という取り組みが紹介された。それを受けて高保校長は、「吉高GPを軸にした教育活動計画は、教師にとって授業、面談、LHRなどあらゆる教育活動で生徒を刺激するツールとなる」と展望を語った。教師たちが何度も口にしたのが、「先ほどのような生徒の対話を、全校規模でつくりたい」という言葉だ。そのような思いに至ったのは、教育活動の当事者として生徒が学校教育目標についてそれぞれの思いを語る場をつくることで、日々の教育活動が学校教育目標と強く結びつき、そして、生徒が学校での学びについて

深く考えていることに全教師が気づくことで、教師一人ひとりの生徒への声かけも大きく変わる可能性があるという考えからだ。そこで、夏季休業前に、クラス代表の生徒による8つの力に関する話し合いの進行役を集めた打ち合わせを行った上で、思ったこと、気がついたことを学年縦断のグループで話し合うという新しい取り組みを実施した。生徒たちの話し合いは、同校の教師たちに、学校教育目標と学校のすべての教育活動を強く結びつけることで、生徒の意識、学びの成果が大きく変わること、そして教師の指導が変わることを実感させたのだ。

山梨県立吉田高校

- ◎校訓は「百折不撓」「純剛」。新入生を対象にした校歌・応援歌指導、富士登山強歩大会などの伝統行事を持つ。「総合的な学習の時間」の中に「富士山学」を設定し、探究学習を行う。ウエイトリフティング、ラグビーなど部活動も盛ん。
- ◎設立 1937(昭和12)年
- ◎形態 全日制/普通科・理数科/共学
- ◎生徒数 1学年約280人
- ◎2017年度入試合格実績(現役のみ)
国立大は、東北大、東京大、一橋大、名古屋大、大阪大などに106人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、中央大、明治大、早稲田などに延べ569人が合格。
- ◎URL <http://www.yoshidah.kai.ed.jp/>